

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 19 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520525

研究課題名（和文）日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した総合的研究

研究課題名（英文）Studies for establishing the pedagogy for Japanese public speaking

研究代表者

深澤 のぞみ（FUKASAWA NOZOMI）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：60313590

研究成果の概要（和文）：日本で専門的な職業に従事する日本語非母語話者が必要とする公的な性質を持つ日本語のコミュニケーション能力を「日本語パブリックスピーキング」能力と呼ぶ。その代表的ジャンルと思われる式辞スピーチとアカデミックプレゼンテーションについて、全体の構成と用いられる定型表現の特徴を明らかにした。またこの結果を用い、外国人日本語学習者のための式辞スピーチ入門の教材を提案した。

研究成果の概要（英文）：

In this study, we defined the skills for "Japanese public speaking" as necessary communication skills in public situation for non-native speakers of Japanese who engage in professional work in Japan. We investigated what kind of characteristics and development patterns Japanese business *shikiji* speeches and academic presentations have as typical genres in Japanese public speaking. Also, we have developed a prototype of teaching material to introduce Japanese business *shikiji* speech to non-native speakers of Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	400,000	120,000	520,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育，パブリックスピーキング，スピーチ，プレゼンテーション，ジャンル分析

1. 研究開始当初の背景

多文化共生時代を迎える日本において、外国人が多様で専門性の高い活動をするためには、口頭コミュニケーションがこれまで以上に重要な意味を持つ。

日本語教育では、従来から会話教育が重視されてきたが、指導項目にどのようなものが

あるのか、そして、実際のニーズとどのように関連を持つのかについては、あまり詳細な調査がされてこなかったという実情がある。

そこで、本研究では、これまで会話教育の中でも、特に「スピーチ」の指導として扱われてきた公的な性質を持つ発話の指導について、「日本語パブリックスピーキング」という

新しい教育の枠組みとシラバスを提案することとした。

2. 研究の目的

現行の日本語教育では、パブリックスピーキングが必要となる実際の場面を意識して、それに適合した教材を提供するというところにあまり関心が持たれてこなかった。そこで本研究では、現行の日本語教育において漠然とした指導が行われてきた「スピーチ」や「プレゼンテーション」について、「ジャンル」の性質に焦点を当てて調査し、その特徴を明らかにする。またそれと並行して、実際の日本語教育で行われている「スピーチ」や「プレゼンテーション」の教育の実態、また、非母語日本語使用者のニーズについても、調査を行う。そして、その結果を、実際の日本語教育にどのように適用できるかを検討する。

これは外国人日本語学習者にとって、高い専門性や社会性のある日本語を駆使することが求められる現実の場において、よりニーズに適合した日本語教育が提供できることを目指している。

3. 研究の方法

本研究は、大きく分けて、3つの部分がある。1) 現行の日本語教育の調査、2) 非母語日本語使用者へのニーズ調査、3) 実際に行われている「スピーチ」や「プレゼンテーション」のジャンル分析による特徴の解明である。それぞれ、以下のような手法で調査を行った。

まず1)の現行の日本語教育の調査については、現在、刊行されている日本語教科書について、「スピーチ」や「プレゼンテーション」など口頭発表を独立して扱った日本語教科書を集め、適合する日本語力のレベル、対象者、取り上げられているジャンル、取り上げられ方などの観点で分類した。そして、考察を加えた。

次に2)の非母語日本語使用者に対するニーズ調査については、現在、実際に高度人材として活動している外国人日本語使用者にインタビュー調査を実施した。本研究では、7人の調査を取り上げた。調査対象者に半構造化インタビューを行い、内容をICレコーダーで録音した上で文字化を行ったものを考察した。

3)のジャンルごとの特徴を解明するために、実際に行われた式辞スピーチや学会でのアカデミックプレゼンテーションについて、実際に収集したものやコーパスなどから収集したものを対象に、Swales(1990)のジャンル分析の手法で分析し、考察を行った。典型的な展開パターンや定型表現の抽出などを

通して、ジャンルによる差異を明らかにした。それぞれの結果を以下に述べる。また、これらの結果をもとに、式辞スピーチ指導のための教材の試作も行った。

4. 研究成果

4.1 研究の結果

平田オリザ(2010) (「劇作家として自然な日本語とは何か」 ICJLE2010 日本語教育世界大会)が話し言葉の教育に先立ち、話し言葉自体のカテゴリーを分類すること、そして学習者のニーズに沿ったものかの検証必要性を提唱したことを受けて、本研究では、まず「パブリックスピーキング」を定義することから始めた。パブリックスピーキングには様々な定義がなされているが、「ある程度改まった場所で、ひとりの話し手が対象となる複数の聴衆に、自分の責任において自分の考えを論理的にまとめて伝えようとする」とし(ヒルマン小林・深澤2009「日本語のビジネススピーチの特徴と日本語教育への活用の可能性」, JSAA-ICJLE 2009 日本語教育国際研究大会(オーストラリア ニューサウスウェールズ大学), p.123)と定めた。この定義をもとに、本研究は進められている。

その上で、現在刊行されている日本語教科書の調査を行い、日本語教育で「スピーチ」や「プレゼンテーション」などとして行われている指導の内容や取り上げられ方などを見た(5.の研究活動における番号雑誌論文⑥)。その結果、日本語教育では従来、口頭コミュニケーション教育が重視されてきており、日本語教科書の中でも大きく扱われている。スピーチやプレゼンテーションは、いわゆる「会話」とは別に扱われていることが多いが、その範囲は教科書によって様々であり、また、スピーチやプレゼンテーション、口頭発表など、様々な用語が定義されずに使用されていることがわかった。日本語教科書では、学術的な研究発表を行うための教育や、スピーチ発表会のためのスピーチ指導が教科書の中で取り上げられていることが多く、日常場面やビジネス場面でのパブリックスピーキングに該当する活動が取り上げられることは数少ないことも明らかになった。つまり、パブリックスピーキング指導自体はこれまでの日本語教育で重視されているが、扱われるジャンルには偏りがあるということになる。

次に、実際に高度人材として活動している外国人日本語使用者にインタビュー調査を行って、日本語でのパブリックスピーキングに関して、仕事上で行っている活動の内容や困難点、日本語教育に求められることなどの聞き取りを行った(雑誌論文⑤)。高度人材

として活動する場合に必要なパブリックスピーキングの能力は、従来の日本語教育の中ではカバーされていないこと、大きい文化差や言語差があるため外国人日本語使用者にとって戸惑いが大きいことなども明らかになった。

同じ日本語教育であっても、背景の文化に違いがある場合の扱いはどうであろうか。これについて、中国の日本語教育における教授法や教材の刊行状況についての翟他(2013)が調査を行った(雑誌論文②)。日本国内の日本語教育と同様、パブリックスピーキングが重視され、特にこれまではスピーチ指導に焦点が当てられていることが多かったが、最近の傾向としては、グループでの口頭発表などもよく採用されていることが調査でわかった。

さらに上記の調査に並行して、日本語の式辞スピーチとアカデミックプレゼンテーション(学術発表)を、ジャンル分析(Swales 1990)の手法で分析と考察を行い、典型的な展開パターンやジャンルを決定する定型表現の抽出を行った。このことは、2つの代表的なジャンルの特徴を明らかにできたことと共に、パブリックスピーキングの特徴を探るのに必要な分析手法を確立したことも意味する。また、パブリックスピーキングの大きい特徴は、聞き手を重視する仕組みを持っていることだと思われるが、この2つのジャンルを比較して、ジャンルによって聴衆重視の度合いには違いがあり、使われる定形表現も異なることなどが明らかになった(雑誌論文①、③)。

本研究では、上述したこれまでにわかったことをもとに、式辞スピーチ指導の教材の試作も行った。

4.2 今後の展望

次のような視点で今後の研究を進めていきたいと考えている。

まず第1に、パブリックスピーキングに含まれるジャンルの全体像を明らかにするという点である。これまでに詳細な分析を行った日本語の式辞スピーチとアカデミックプレゼンテーションの他に、海外でのパブリックスピーキング指導の聞き取り調査などで強調されることが多かったスピーチコンテストにおけるスピーチや、ビジネスの場でのプレゼンテーション、就職面接の場などでの意見表明など、まだ分析していないジャンルがあるものと思われる。

次に、同一ジャンルのパブリックスピーキングであっても、その展開や定形表現などの点で、日本語によるものと他の言語によるものとで差異がある可能性があることである。このことは、外国人日本語使用者への聞き取

り調査の際に述べられることが多く、同じような式典での式辞スピーチにしても日本語と、たとえば英語、中国語によるものとは、異なりがある可能性が示唆された。これは、自らがスピーチをする場合にはもとより、高度人材としての業務で、たとえば外交官が行う国家要人の通訳や、国際交流員が行う自治体の長の通訳、企業トップの通訳など、社会的地位の高い話者の式辞スピーチの通訳といった場でも問題になる。特に、昨今の状況に見られる近隣諸国との関係に難しい局面があるような場合、典型的な展開パターンや、場にふさわしい定型表現に関する知識がなかったために礼を失っているとみなされることなどは避けなければならない、きわめて重要なものとなる。このようなことを念頭に、パブリックスピーキングの同じジャンルで、日本語と英語や中国語で行われるものとの比較研究を行う。

さらに、新しいパブリックスピーキングのスタイルが出てきていることにも注目したい。たとえば、最新IT機器の製品発表などでのプレゼンテーションは、これまでの演台を前にしたいいわゆるビジネスプレゼンとは全く違うカジュアルなセッティングで、聴衆に直接近寄り語りかけるようなスタイルで行われる。また大学生などの間で盛んになりつつある書評活動「ビブリオバトル」(2007年に谷口忠大によって開始された書評活動で、学生が自分の好きな書籍について5分で発表し、聴衆の投票によって「チャンプ本」を選出するというものである。最近では、大学を中心に活動が広がっている。)は、意見表明のスピーチやアカデミックプレゼンテーションとは違うスタイルが取られている。これらの新しいスタイルは、従来のパブリックスピーキングと違うのか、どのような特徴があるのかを見ていく。

最終的には、これらの結果を総合して、効果的な指導法を考案することを目指す。従来の日本語教育における口頭コミュニケーション教育ではカバーしきれなかった内容を盛り込み、高度人材としての外国人日本語使用者を対象とした指導法を目指すだけでなく、パブリックスピーキングの文化差や新しいスタイルのパブリックスピーキングの特徴が明らかにして、グローバル化の中で活動する日本語母語話者に不可欠なコミュニケーション上の知識を提供することにもつなげたいと考えている。

グローバル化が進むということは、価値観や背景となる文化が異なる人々が交流するということであり、これまでになかった摩擦や誤解が生じる可能性が常にあるということでもある。このようなことは、単にある言語の知識を多く持ち、高い運用力があれば克服できるというものではない。特に、

パブリックスピーキングは多くの人の前で話をするのであり、その影響力は小さいものではないだけに、異なりの原因を正しく把握することが最も重要である。本研究が、グローバル化時代のコミュニケーションの発展に寄与できるよう、進めていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子「パブリックスピーキングとしてのアカデミックプレゼンテーションにおける聴衆重視の仕組み—式辞スピーチとの比較から—」『応用言語学研究論集』第 6 輯, 査読無, 2012 年, pp. 40-53
- ② 翟東娜, 吳麗楠「中国で刊行された日本語教科書における口頭発表について」『応用言語学研究論集』第 6 輯, 査読無, 2012 年, pp. 14-39
- ③ 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子「日本語式辞スピーチの構成要素と展開パターン—日本語パブリックスピーキングの一ジャンルの特徴として—」『専門日本語教育研究』第 14 号, 査読有, 2012 年, pp. 27-34
- ④ 深澤のぞみ・陳会林・張鵬「日本語教育におけるスピーチ指導の可能性—全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選の参加校の取り組みを例として—」『応用言語学研究論集』(金沢大学人間社会研究科) 第 5 輯, 査読無, 2012 年, pp. 16-42
- ⑤ 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子「日本語パブリックスピーキング能力養成のニーズを探るための基礎調査」『金沢大学留学生センター紀要』第 15 号, 査読有, 2012 年, pp. 5-43
- ⑥ 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子「日本語教科書における口頭発表指導について—日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した基礎研究—」『金沢大学留学生センター紀要』第 14 号, 査読有, 2011 年, pp. 29-42

[学会発表] (計 4 件)

- ① 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子「日本語式辞スピーチにおける聞き手重視のしくみ—日本語パブリックスピーキング

の特徴として」北京師範大学金沢大学日本語教育フォーラム, 2012 年 9 月 22 日, 北京師範大学 (中華人民共和国)

- ② ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ「外国人日本語話者のパブリックスピーキングに関するニーズ調査」『日本語教育国際研究大会名古屋 2012 予稿集第一分冊』p. 275, 2012 年 8 月 18 日, 名古屋大学 (愛知県)
- ③ 深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子「日本語ビジネス (式辞) スピーチの構造—パブリックスピーキングの一ジャンルとして—」, 2011 年度日本語教育学会春季大会予稿集, pp. 159-164, 2011 年 5 月 22 日, 東京国際大学 (埼玉県),
- ④ ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ「パブリックスピーキングのジャンルとしての日本語式辞スピーチの特徴」, ICJLE2010 日本語教育世界大会, 2010 年 7 月 31 日, 台湾国立政治大学 (台湾)

[図書] (計 1 件)

- ① 主編 翟東娜, 部分執筆 深澤のぞみ, 「口頭発表」『基礎日語 口語教程 2』, 中国 高等教育出版社, pp. 93-138, 2011 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深澤 のぞみ (FUKASAWA NOZOMI)
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号: 60313590

(2) 研究分担者

三浦 香苗 (MIURA KANAE)
金沢大学・国際機構留学生センター・教授
研究者番号: 50239175